

認知症サポーターの活動事例・チームオレンジ取り組み事例・ 認知症サポーターキャラバン優良啓発事例 表彰団体一覧

部門	応募者
「認知症サポーターの活動事例」 (自治体) 【最優秀賞】	板橋区認知症サポーターのひろば (東京都板橋区) ◆ “いたばし認地笑かるた” で誰もが暮らしやすい土壌をつくる 選考理由: 認知症サポーター(当事者を含む)約 10 名のグループで地域包括支援センター等との連携のもと、認知症サポーターが地域でできることを考え、実践している。 サポーター養成講座で行う演劇活動(認知症村芝居)のほか、「いたばし認地笑かるた」の企画から制作協力を行う。子どもから大人まで楽しめるかるたであり、認知症の人本人、家族、周囲の人などさまざまな立場の人の視点や思いに配慮した読み句と解説文、中学生が作成した絵札等、細部まで工夫が凝らされている。認知症の理解の啓発を一般住民だからこそできる感覚と手法を駆使して多世代協力のもとに実施しており、高く評価される。
「認知症サポーターの活動事例」 (自治体) 【優秀賞】	高齢者あんしん相談センター館 (東京都八王子市) ◆ 当事者とキッズサポーターの対話・交流型講座を土台とする地域づくり 選考理由: 地域の小学校 4～6 年生を対象に 3 部構成で開催するキッズサポーター養成講座内において、地域密着型デイサービスに通う当事者との交流体験(小学生と当事者が協力して行う駄菓子屋体験)、当事者と語る会のプログラムを設け、住民の協力も得て地域での認知症への理解を深める活動を実践している。 小学生が認知症の当事者の生の声を聴き、工夫しながら生活して様子や周囲の人へ望むことを学ぶことにより、体験を踏まえた福祉学習としての成果があると同時に、当事者の重要な情報発信、活動の場となっている。これをきっかけとして、地域住民の意識に変化をもたらす効果が得られている。
「認知症サポーターの活動事例」 (自治体) 【特別賞】	チーム南港 (大阪府大阪市) ◆ “行動できる中学生サポーター” の養成を通じた地域連携 選考理由: 地域の多職種のキャラバン・メイトの協力体制により、継続して中学校でのサポーター養成講座に取り組む。 ・中学 2 年で認知症サポーター養成講座、3 年でフォローアップ講座を行い、高齢者、認知症の知識の他に、ヤングケアラーの情報を盛り込んだり、困っている高齢者への声のかけ方、災害時の支援方法を実践的な授業内容で伝え、“地域の担い手” として期待される中学生が主体的に考えられるような学習機会を通して地域づくりに結びつけている。

「認知症サポーターの活動事例」
(企業・職域団体)

【最優秀賞】

八王子市中央図書館
(東京都八王子市)

◆認知症の当事者とともに歩む地域の情報拠点

選考理由:職員へのサポーター養成のほか、サポーター講座をはじめ、多様な障害をテーマとする親子向け講座を地域の多様な団体との協力のもとに開催し、知識と体験の双方向から学ぶ場を提供する。

館内会議室を会場とし、当事者も参加する出前型の認知症家族サロンを開催し、絵本の読み聞かせや健康相談コーナーのある交流機会を設ける。

従来から図書館を利用している認知症の当事者の人を中心に、館内を歩いてみて利用者の立場で本の探しやすさ、表示のわかりやすさ等を点検する取り組みを行い、図書館スタッフとの意見交換を繰り返して、表示方法の改善につなげる成果を挙げている。

地域住民に身近であり、また多機関との連携を図りやすい図書館の特性を生かして、誰もが利用しやすい環境づくりを実践する中で認知症への理解を広げており、高く評価される。

「認知症サポーターの活動事例」
(企業・職域団体)

【優秀賞】

岡三にいがた証券株式会社

◆店舗でのカフェ開催を通して認知症バリアフリー企業を目指す

選考理由:2021年に全職員約200人が認知症サポーターとなり、その後認知症バリアフリー宣言に参画する。

コロナ禍で使用されていなかったセミナー施設を提供し、認知症疾患医療センター、地域包括支援センターと連携し、認知症カフェ開設に取り組む。行政が行う市民向けサポーター養成にも協力し、受講者からカフェボランティアも募っている。

支店ごとに警察署と連携して、所在不明高齢者等の情報を社内イントラメールで配信・共有する取り組み、市が行う「シルバーささえ隊」に加入し、業務を通しての見守り活動等、金融機関として認知症バリアフリー社会実現へ向けた具体的な取り組みを意欲的に展開している。

「認知症サポーターの活動事例」
(企業・職域団体)

【社会貢献賞】

株式会社イトーヨーカ堂

◆サポーター養成を核に、地域社会とともに進化を続ける

選考理由:従業員に対するサポーター養成は、全従業員の半数を超える約1万4千人超を数える。

自治体との協定締結にも積極的であり、協定をスタート地点として高齢者を含む多様な住民が集う場を提供することを通し、介護予防や見守りにも貢献するコミュニティの拠点となっている。

八王子市との取り組みでは、地域包括支援センターと企業職員で、店舗内での接客を通じた事例に基づき課題解決に向けたディスカッションを行うことを経て、得られた成果をサポーター講座の内容に盛り込むほか、地域の当事者の声も取り入れている。

地域の認知症の当事者の会との対話の場を設け、当事者と従業員が互いに不安や疑問について意見交換した上で、当事者に一緒に店舗内を巡って課題を挙げてもらう「練り歩き」を実施。レジでの接客や案内表示などの改善に本人視点で取り組んでおり、認知症バリアフリーの実践として評価される。

「チームオレンジ取り組み事例」

【最優秀賞】

チームオレンジ清瀬
(東京都清瀬市)

◆支援する人、される人の垣根なく誰もが集えるオレンジハウス

選考理由:令和3年6月から住民サポーターを中心とするメンバーで6回に及ぶミーティングを開催し、活動の方針・内容を検討し、令和4年4月から活動を開始。

空き家を利用した拠点「中清戸オレンジハウス」には週1回、10～15時に開設、メンバーが常駐し、予約なしに地域の誰もが参加し交流できる場を提供している。

拠点のしつらえの工夫から個人情報の扱いや認知症についての呼称についても約束事を決めるまで、住民目線での心配りがなされ、これに地域包括支援センター、認知症地域支援推進員、認知症疾患医療センター、初期集中支援チーム等諸機関が協力する。

拠点においては認知症の当事者が得意分野の先生役として交流活動の中心となり、関わるメンバー、専門職の人たちが「支援する人、される人」の垣根を超えたチームオレンジの活動趣旨の重要性を実感するに至っている。

「チームオレンジ取り組み事例」

【優秀賞】

松戸市矢切地区チームオレンジ協力員
(千葉県松戸市)

◆メンバー自らが楽しむ活動で地域課題解決に挑む

選考理由:平成29年から開催されている「サロンわたし」において、コロナ禍でのフレイル、引きこもりによる筋力低下、社会交流の減少が地域課題として提起されたことから、防犯をかねたパトウォークを開始した。

メンバーのフレイル予防、防犯対策として始まったが、住民サポーターと地域包括支援センター等とのきめ細かい情報共有、周知活動により、パトウォーク自体が当事者やその家族、地域住民の交流の場として機能しており、評価に値する。

「チームオレンジ取り組み事例」

【特別賞】

MK(まじでかいてき)あおぞら教室 さくら組
(岡山県岡山市)

◆サポーター邸の庭を活動拠点にメンバーの「希望」を地域に発信

選考理由:市の介護予防体操を行う交流グループがチームオレンジの趣旨に賛同し、認知症サポーターの自宅軒下を週1回、拠点として開放し、毎週約10名が集まる。

初期集中支援チームが担当した認知症の当事者・家族のニーズをチームオレンジの活動につなげたほか、地域包括支援センター、町内会長、民生委員、生活支援コーディネーターとの協力、情報共有を行い、着実に地域のしくみづくりを前進させている。

当事者が「わからなかったら聞ける雰囲気」や自ら「ボランティアができること」を評価しており、参加するメンバーが楽しく、ためになることをできる場となる成果を挙げている。

「認知症サポーターキャラバン
優良啓発事例」

【最優秀賞】

香川県小豆島町

◆オリジナル啓発絵本配布で認知症への理解を育む

選考理由:小豆島こまめ事業(生活支援体制整備事業)PR キャラクターを用いた、啓発絵本を作成、配布している。

多くの世代が手にとって親しめる絵本を介した、認知症の正しい理解と地域での活動につながる情報を発信が、多様な角度からの啓発となっており、独創性が評価される。

「認知症サポーターキャラバン
優良啓発事例」

【優秀賞】

兵庫県明石市

◆多様な取組を通して

「認知症あんしんまちづくり条例」の理念を共有

選考理由:「認知症にやさしいまち明石」実現に向けた条例を制定、地域理解、地域活動の促進を図るための「あかしオレンジサポーター制度」を創設し、普及のためのバッジ、ステッカー、オリジナルグッズの作成・配布する。

まちづくりの理念を浸透させ、さらに活動のモチベーションにつながる推進ツール活用推進をきめ細かな計画もとに実施しており、他の参考となる取り組みである。